

序

性感染症 (sexually transmitted infection : STI) に罹患し受診してくる患者は、心配、羞恥、後悔など、心理面でも負荷をせおって、医家の門を叩きます。その状況下で医師は、患者の意をどのように汲み取って、診療を進めていくかといった実際面を解説した著書が今まで見当たらないので、そこにひとつの力点をおいて、企画を立てました。外来診療の中で性感染症をどのような流れで診断・治療するか、患者にどう接するか、といった日常的な事柄を取り上げつつ、疾患への理解も深めてもらうのが本書の狙いです。

患者の気持ちを解きほぐし、一方で、確実に診断し首尾よく完治させてあげるには、医師の頭に定石と鑑別と必要な検査手順がまずしっかりと組み込まれていること、いったん診断が確定したら、適正な治療手段を提示し、患者の心配を理解しつつ治療までを見届けるロードマップを示せることが肝要です。

現在の日本では性感染症科あるいは性病科という標榜名が認められておらず、性感染症皮膚科、性感染症泌尿器科、性感染症内科という具合には標榜できますが、それらではこの分野が広く包含できないという難点があります。以前に性病科の標榜が認められていた時期にそれを取得している場合は既得権として引き続き標榜できますが、最近では医師の世代交代で性病科は減ってしまいました。

性感染症科という包括的な標榜ができない現在、性感染症の患者は、多くが泌尿器科、産婦人科あるいは皮膚科を受診していることと思われまふ。実際には、初発症状から耳鼻咽喉科、眼科、そして内科を訪れる患者も少なくはなく、本書では、咽頭感染のことなどにも可及的に言及はしていますが、まずは、性器周辺の症候・疾患を正確に把握していただくことに力点を置いた解説となっていることをご了解いただきたいと思います。

本書籍では、関東と関西とで性感染症の診療を長年、第一線で続けておられるまさに達人である尾上泰彦先生と古林敬一先生とに第1章では荒川創一を交えた鼎談で診療のポイントを語っていただき、第2章で古林先生に疾患ごと系統的なミニ解説、第3章で尾上先生にアトラスで、各性感染症のより具体的な解説をしていただいています。

第1章で語られている行間を理解していただいたうえで、第2・3章で、さらに正確な知識を固めていただく構成となっており、開業医の先生方は診察室の机の上にいわば「虎の巻」として本書を常備していただければ、きっと診療のお役に立つと考えております。

私自身、泌尿器科医ですが大学病院に籍を置いていた時期が長く、その間は、第一線の医療機関に非常勤で診察担当する折に、性感染症診療を経験してはいましたが、現在は市民病院に勤務し様々な病態のSTIに接し、その奥の深さに改めて目覚めているところです。

紀元前ヒポクラテスの時代から記載がある性感染症、人類とともに歩んできたその病原微生物の不可思議さ、それらの実際を診察室で体得しつつ、適切な診療を施すためにこの指南版を是非、座右書にして活用いただければ幸いです。

2021年11月
荒川創一 記